特集・横浜の市民生活―課題と解決の方向❶

横浜の市民生活

課題と解決の方向

①なぜ、今市民生活に目を向けるのか
②市民生活に関する課題と政策展開の方向
③市民生活に見られる流れと問題点
④課題と政策展開の方向

①なぜ、今 市民生活に目を向けるのか

「生活」の政治化とその背景

一――「生活」議論の三つの背景
二――課題解決への新しいアプローチの要請

一――「生活」議論の三つの背景

八〇年代の後半から九〇年代にかけて特徴的なことは「生活」が国や自治体において政策議論の中心テーマに登場してきたことであり、また様々な政党においても生活が政治の言葉として大きく取り上げられるようになったことであろう。

これまで、生活という言葉は、消費で語られ、収入と所得で語られ、職業としての労働で語られてきた。したがって政治の面から語る言葉としては、産業振興と所得の上昇であり、豊富な消費と便利な生活であった。そして、国民経済の成長とともに生活は向上してゆくものであった。

しかし八〇年代に入ると、生活が「ゆとり」や「環境」の側面、あるいは「家族」や「まちづくり」など、様々なコンテクストで語られ始められるようになった。このように生活を語る文脈は多様であるが、生活に大きく焦点があてられた背景には、先進社会と比較して、GNPで見れば世界のトップ水準に並ぶはずの日本人の生活が、どうも実感として納得できない、という現実とのギャップに対する認識が広まったことであろう。私たちの経済は、あるいは私たちのこれまでの働き方は、私たちの生活にうまく寄与しているのだろうか。

もう一つは戦後四十年を通じて作ってきた生活様式をこのまま続けていけるのか、あるいは続けていってよいのか、という疑問である。近

代化・工業化は都市化と都市的生活様式をつくりだした。そしてまた東京という巨大都市圏を誕生させている。現代の後期産業社会は大都市に、その成長のポテンシャルを求めるようになった。確かに、安全で機能的な巨大都市圏は産業活動に適合している。しかしそこで営まれている生活様式は、都市の自然的あるいは社会的キャパシティを超えつつあるのではないか。こうした生活様式は、未来にわたって続けてはいけないのではないか、という予感を持つようになってきた。

そして第三には長寿社会が投げかける、人生と老後のイメージの不明瞭さであろう。職業生活においても、従来の一生涯一ジョブという考え方は実情にあわなくなりつつあり、特に女性にとって子育て後の期間は、もう一つの生涯を生きるに十分な程の時間がもてるようになりつつある。どうも一つのライフサイクルのイメージでは、人生を語れなくなりつつあるのではないか。

二――課題解決への新しいアプローチの要請

これまで高度成長時代を通じて形成してきた生活課題解決の枠組みは、産業を振興させ、所得を拡大させ、それを中央集権的な機構によって分配することであった。しかし基層的変化のなかで私たちの認識では、九〇年代とは、これまでの生活課題解決スタイルでは、なかなかアプローチできない問題がクローズ・アップされる時代なのではないかと思える。

そこで、横浜市に限らず九〇年代の市民生活の特徴は、豊かさの概念、環境問題、世代交代、多様化といったキーワードで挙げられるような、様々な生活をめぐる新しい潮流や価値観と、これまで安定していた政治的社会的課題解決の構造との間に、様々な不均衡や乖離が目立ち始めたことであり、従来その構造を保っていた安全弁としての、各種の調整機能が、うまく動作しにくくなり「生活が政治化される」時代になってきているといえるのではなかろうか。バブルの時代は、従来の社会構造のあるいは生活構造の中に、市民の生活領域の不均衡を作り出すメカニズムが潜んでいることを見せつけたとも言える。

九〇年代における生活構造の変化を促すこのような潮流は、働き方、消費のしかた、家族の関係、地域社会の在り方、そして経済と政治の在り方にも様々な課題を投げかけると同時に、生活課題解決の新たな枠組みの模索を要請してきている。

生活課題の新たな設定と解決の枠組みに見通しをつけるというテーマは、なかなか難しいテーマで、市民共通の認識に至るまでには長い時間と議論を要するであろう。

「横浜市民生活構造動向研究会」は、こうした問題意識に立ち、学者、民間の研究者、そして職員有志が参加して議論してきた。もちろん「生活」の捉え方には多様な観点からのアプローチが可能であると同時に、「生活」は捉え切れないという限界を認識しつつも、一つの話題提供として、市民生活の課題設定を試みた。議論の参考になれば幸いである。

横浜市民生活構造動向研究会